
表と裏 ルーフェイア・シリーズ06

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

表と裏 ルーフェイア・シリーズ06

【Nコード】

N4180E

【作者名】

こつこ

【あらすじ】

金と銀、碧と紅、女子と男子、容姿も性別も性格も正反対の、だ
が同じ過去を持つ二人……。心優しい美少女が繰り広げる、異色の
学園バトルファンタジー 「タシユア登場」この一言に尽きるか
もしれません 反王道、「無情」という名の条理がある」とまで言
われた、ひたすらビターなシリーズです 携帯版は1行毎の空行
です シリーズの第6作になります

Episode : 01 遭遇

In Library

ふつと気配を感じて、その男子生徒は顔を上げた。

長身で、整った顔立ちに紅い瞳。

腰まである髪は珍しい銀色——前髪の一房だけ瞳と同じ紅色——で、それを一度うなじのところまでまとめて、さらに三つ編みにしていた。

掛けられた縁のない眼鏡が、いかにも知的な感じを与える。

名は、タシユア・リュウローン。おそらく学内でも、知らぬものはいないかという有名な人だ。物腰は穏やかで、言葉遣いも丁寧。しかもその態度は上・下級生を問わず変わることがない。

だが。

「人が本を読んでいる時に、横からのぞかれることがどんなに迷惑か、想像もできないのですか？」

言葉こそ丁寧だが、その声は氷よりも冷たい。

実はこのタシユア、その容姿以上に「毒舌家」ということで知られている。とうぜん覗きこんでいた、金髪碧眼、妖精のような雰囲気、華奢な美少女——つまりルーフェイア——も、その毒舌の餌食となった。

「あなたが同じようなことをされた時のことを、考えてみなさい」「すつ……すみません」

おそらく悪気などまったくなかったのだろうが、タシユアにそう言われて、ルーフェイアがすみあがる。

「謝るのでしたら、最初からやらなければいいでしょう」

「う、ごめんなさいっ!!」

たちまちその瞳に、涙があふれた。だがタシユアは言葉を止めない。

「なんでも泣けば済むと思ったら、大間違いですよ」

「……………」

必死に泣くのをこらえようとしている少女を、タシユアは冷たい視線で見返す。

たまたま居合わせた生徒たちが、この成り行きを心配そうに見ている。だが恐れをなしてか、口を挟む者はいなかった。

と、そこへ図書館とは思えないほどの声が響く。

「ちょっとタシユア、なに下級生いじめてんのよ!」

「誰もいじめてなどいけません。礼儀を失っているのを指摘してあげただけなのですから、むしろ感謝してほしいくらいですね。」

それに口ア、あなたも図書館でそんな大きな声を出すなど、上級生の態度とはとても思えませんか?」

「なんですって……………」

いっばつで完全に頭に血が上った口アに対し、タシユアは嫌味なほどに冷静なままだ。

Episode:02

「先輩、いいんです！　ほんとにあたしが悪いんですから！」

ルーフェイアがとつさに間に入らなかつたら、またひと悶着あったかもしれない。

「けどねえ、ルーフェ！」

「ほんとなんです！」

あの、先輩、すみませんでした。こんどから……気をつけます」

少女が丁寧に頭を下げる。

だがタシユアはそれに答えるどころか、完全に無視して視線を本に戻しただけだ。

「――！」

再び何事が言いかけたロアだが、今度もルーフェイアが止める。

「あたしが悪いんですから！」

「……………」

少女の必死の懇願に、ロアもようやく怒りの矛先を納めた。

タシユアを睨みつけてから、ルーフェイアの手を引いて図書館を出て行く。

「ところでさ、なんだってあんなやつに、ちょっかいだしたわけ？」

外へ出てから、ロアは少女に尋ねた。

「あの、本の詳しい題名……見たくて」

「だからって何も、あんなののそばに、わざわざ行かなくなつて」

ロアが呆れる。

「あの、そんなに……ダメないんですか？」

「いけないもなにも――って、そうか。ルーフェは知らなかつたん

だ」

ロアはタシユアと同クラスだし、しかもほとんど同時に入学しているが、ルーフェイアはまだ学院に来て一年と経っていない。いくらタシユアが有名人とは言え、同級生でないのだから、知らないのもうなずけた。

「あいつさ、タシユア」リユウロンって言うんだよね。で、学年でもトップクラス。それにあの通り、外た目もまあ、悪くないんだけどさ。けど中身がねー！」

よほど腹に据えかねたのか、息つく間もなくロアが喋る。

「まったく、あの口の悪さだよ?！」

本人は『事実言ってるだけ』って言うけどさ、なんでも言やあいつてもんじゃないっての!」

ロアはまだ、怒りが収まりきっていないようだ。

「でも……あたしが……」

「ほんとにそうでも、普通ああは言わないよ!」

——あゝもう! また腹立ってきた。ちよつとルーフェ、どっか行って憂さ晴らしっ!」

ルーフェイアの手を強引に引いて、ロアは食堂へ向かった。

Episode:03

Tasha side

ロアとルーフェアが出ていった図書館で、噂の当人は何事もなかったかのように、本を読み続けていた。

こちらに視線を向けて、こそこそと話をしている者もいるが、彼に気にする様子はない。

聞こえていないのか、それとも無視しているのか。

そんな中、背中の中程まで伸ばした艶やかな黒髪に、紫水晶の瞳をした長身の女子生徒が、唯一恐れる様子もなく彼に近づいた。そして一言。

「また……やったのか？」

「おや、シルファ」

ルーフェアに対したときの態度に比べると、ずいぶんと穏やかだ。

——シルファ、カリクトウス。

このシエラ学院ではば唯一、タシユアが心を許す相手だった。

「もう少し考えて話せばいいものを……あの子、泣いていたではないか」

「事実を指摘したまでです」

いつものように返す。

タシユアは嘘は言わない。常に冷静に事実を指摘するだけだ。もっともその指摘の仕方が、かなり問題なのが。

やれやれと軽いため息をついて、シルファは言葉を続けた。

「事実にしても、きつすぎるだろう」

この学院でタシユアにこれだけ言えるのは、ほかにいない。それだけこの二人の距離は、近かった。

ただこれは、シルファのほうも似た部分がある。

美人と言える彼女だが、シエラに居る他の生徒と同じように、身内の縁は薄かった。加えて彼女の場合、子供の頃の体験が尾を引いて、他人とコミュニケーションをとるのが苦手だ。

このため女子にしては口数が少なく、しかも男性のような喋りかたをするため、愛嬌とは程遠い。そのせいだろう、男子生徒の間では、「可愛げがない」という評価だった。

じつは年下の女子生徒には、だいぶ騒がれているのだが……。だがこれも本人が理解していないので、かなり無意味だった。

「初対面の年下の子に対して、何か考えればいいものを」

傍目からは分かりづらいが、シルファは決して冷たい性格ではない。むしろ優しく、面倒見がいいほうだ。

だからいまも、あの子が何をしたということより、「泣かせた」というほうに気が向いているのだろう。

この辺もコミュニケーションが不得手なために、かなり損をしている。

「初対面ではありませんよ」

「違うのか……？」

聞き返されて、タシユアはよどみなく答えた。

「名前はルーフェイア・グレイス。年度途中の入学だというのに、いきなり本校へ入学した上、Aクラス入りまで果たしています。

それによくここでは見かけますし、頼まれごとをしてあげたこともあります」

「頼まれ……ごと？」

このタシユアの言葉には、シルファも驚いたような表情を見せた。

「二ヶ月ほど前でしたかね？ 高いところにある本が取れなくて、ちょうどそばにいた私に頼んだのですよ。そのときはもっと、礼儀正しかったのですがね」

彼女がそのことを覚えているかどうかは知りませんが、と彼は最後に付け加える。

礼儀を守る相手に対しては礼儀を守る。が、それを失っている場合には容赦しない。それがタシユアのやり方だった。

「あの子がルーフェイアか。」

クラス男子が噂していて、名前は聞いたことがあったが……」

思い出すように言うシルファに、タシユアは言葉を重ねる。

「ろくな噂ではないでしょうね。あの子を外見だけで判断すると、痛い目にありますよ」

「……どういうことだ？」

シルファの問いに対してタシユアは、「そのうちわかります」とだけ応えると、音もなく立ち上った。

音だけではなく、気配もない。もし目をつぶっていたなら、隣に立たれてもまったく気づかないだろう。

彼がかつて居た場所で身につけ、いまはもう当たり前になってしまった、そういうものだ。

だがそのタシユアは思う。

（あの身のこなし、それになにより、あの『気配』……私と同類か、似た存在でしょうね）

シエラへ来るべきして来た少女だろう、それがタシユアの判断だった。

Episode : 04

R u f e i r

図書館でひと騒動あったあと、先輩に連れられて夕食を食べて、あたしはひとりで寮の自室にもどった。ロア先輩はまだ用事があるみたいで、とちゅうで別れた。

いつもなら消灯時間を過ぎてからだけど、今日は早めに端末の前に座る。先輩が帰ってくるまでに、このあいだ教えてもらった場所へ行つて勉強(?)しようと思った。

起動させて、魔視鏡の設定を変える。

いつも使ってる、ロア先輩作の専用の魔令譜——動作を自動化したシステム群——をいくつも表に出して、交信を開始した。

まず、学院内をひと回りしてみる。消灯時間前なのもあって、動いてる魔視鏡がいっぱいあった。

そのなかから、珍しく学院長のを見つける。

——あの伝言書、処分しないと。

あのかきはあんな騒ぎになって、そのあと気づいたときは、学院長の魔視鏡は動いてなかった。

それからもずっと見てたけど、学院長室の魔視鏡は夜や休日は動かなくて、いままで消せずじまいだ。

先輩に教わったとおり、そつと忍び込んであの伝言を選んで、専用の魔令譜を動かす。

拍子抜けするほどあっさり、学院長の魔視鏡から、それが消えた。証拠を残したりしてないかがちよつと心配だけど……たぶん、大丈夫だろう。ざつと見たけどそういうのはなかったし、それに万一ほんの少し残ってたとしても、学院長じゃ分らないと思う。

それから少しのあいだ、学内の通信網をうろつろしてから、こんどは外へ行ってみる。

もつともあたしじゃその辺の、ガードの甘いところへ入りこむのがせいぜいだ。だいぶ上手くはなってきたけれど、とてもちゃんとした所は手が出せない。

とうぜん拾える情報も、たかが知れてた。

それでもこうやって、ひとりで出歩けるようになってきたのが、けっこう嬉しい。浮かれすぎてハメを外さないよう自制しながら、あちこち歩いてみる。

——あ、これおもしろい。

ときどき、思いもかけないようなやり方をしている魔令譜を見つけて、ちよつと感心してみたりする。

そうやって一時間以上、あちこち歩きまわっただろうか？

さすがに少し疲れて、あたしは潜りこむのを止めた。便利なロア先輩作の魔令譜類はそのまま、暗記している通信石番号を直接打ちこむ。

いつもと同じ、認証手続きの画像。

シユマー内部の通信網だ。

けど手続きをしようとした時、魔視鏡に警告表示が出た。

監視用の魔令譜が、警告を発している。

あたしがまだ慣れていないのを心配したロア先輩が、特別に作って組み込んでくれたものだ。一定時間誰か（あるいは何か）がそばにいと、危険と判断して警告を出してくれる仕組みだった。

慌てて周囲を調べてみる。けど、相手の姿は全く見えない。

でも誰かがあたしを見張ってるのは、間違いがなかった。

Episode : 05

——ともかくここを離れないと。

シユマーの内部に入られでもしたら、大変なことになる。

急いで交信記録を消しながら、別の通信ポイントへと移る。

なんだかひとつ飛んだだけじゃ安心できなくて、二つ、三つと移動した。

けど。

——警告が消えない?!

その「誰か」は、あたしの後をびったりとついてきていた。

まるで頭から、冷水をかけられたような気がする。

でも、どうにか逃げないといけない。相手が誰にせよ、捕まったら大変なことになる。

なるべく自分が知っているポイントを経由するようにしながら、

必死で逃げ回った。

けど、捲けない。

向こうのスピードが速すぎて、太刀打ちができない。

足跡を消さなければ逃げられるかもしれないけど、それをやってしまったら終わりだ。

逃げ道がないかと、ざっと通信網を見渡す。幸いすぐ近くに、使われていないルートがあった。

ここを使えば、そう思っただけで通ろうとして。

——しまった!

ブロックされてる。こっちの手を読まれて、先回りされてる。

逃げられない、そう思ったとき不意に、魔視鏡に伝言が現れた。

『意外にやりますね、楽しかったですよ。——では、またいずれ』
わざわざこんなふうに危険を侵してメッセージを送るなんて、よほど自信がある証拠だ。

急いでメッセージから逆探知しようとしたけど、当然そんなことをさせてくれる相手じゃなかった。やっと分かったのは、学内からアクセスしているってことだけ。

そして警告表示が消える。

思わず倒れそうになったけれど、どうにかこらえてきちんと、手順を踏んで交信を終えた。

身体が汗でびっしょりだ。

息が苦しい。

戦場で太刀を振り回している方が、よほど楽だ。

「ただいま、遅くなっちゃってさ。あれ、ルーフェ？」

ロア先輩が戻ってきたけれど、立ち上がる気力もない。

「どしたの！」

「交信してて……誰かに、追いかけられて……」

やっとそれだけ言っと、すぐ先輩は事情を飲み込んでくれた。

「わかった。キミの端末どこ通ったか記録するようにしておいたから、あたしが足跡みてあげるよ。」

——だから心配しないで？」

「はい……」

少し安心して、立ち上がる。

「ルーフェはもういいから、寝るんだよ？　かなり顔色悪いから」

「……すみません」

ロア先輩が見てくれるのだからだいじょうぶ、そう自分を無理やり納得させて、あたしはベッドにもぐりこんだ。

Episode : 06

Tasha said

「さて、どうしましょうかね？」

ふと、独り言がこぼれた。まだ消灯時間には早い、今日は珍しく時間が空いている。

この春、上級傭兵に最年少で昇級したタシユアは、何かと忙しかった。こき使おうということなのか、些細な魔獣退治などを命じられることが多い。

（別になりたくてなったわけでも、ないのですがね）

なにしろあの性格だ。学院の課題など必要ないと思えば平然と無視するし、教官にも言い返すので減点もされている。

そもそもこの学院に腰を落着けているのも、ここに居れば暮らすに困らないというだけの理由だ。追い出されてもかまわないと思っ
っているから、御しようがない。

しかもそれでもなお、学年トップクラスなのだから、タチが悪い
としか言いようがなかった。

教官たちもそうとうモメたようだが、能力だけは文句なしに優秀なタシユアを、使わない手はない。けっきょく協議のすえ仰々しい
任命書が手渡され、単独で出来る仕事をする、ということになった。
——もつとも他の生徒なら数人がかりのことでも、彼の場合ほとんど
独りで出来てしまうのだが。

ともかくそのせいか、タシユアから見れば雑用のようなことが、
回されることが多かった。

それでも大人しく——あくまでも彼の基準だが——引き受けているのは、この立場なら給料が出ることと、個室に入れることが大き

い。

タシユアがいまいちばん興味を惹かれているのは、魔視鏡とその向こうに広がる世界だ。煩わしい人間関係などお構いなしに、自分の技量ひとつで可能性が広がっていくこの世界は、純粹に面白かった。

だがそれをするにしても、同居人がいては制限が大きい。

これといって苦勞せず暮らせ、好きなものを買える程度のお金も手に入り、あとは個室で好きにしていられる。

この辺が、タシユアが昇格と派遣任務とを受け入れた理由だった。

二台ある魔視鏡を起動させる。

片方は、三年ほど前に卒業した先輩から譲り受けたもの。ただ年数が経っているためにいまいち能力が低く、いろいろと無茶な改造をしてはみたものの、満足のいく性能にはなっていない。

残る一台は先日わざわざ部品を購入し、魔令譜も物によっては改造や自作をして、自分で組み上げたものだ。さすがに先輩のお古ではやれることが限られてしまったため、貯金と初めての給料とをつぎ込んで、納得の行く性能のものを作り上げた。

いまはこの二台を、学院内用と学院外用として使い分け、やりたいことをやっている。

「ふむ……」

いつものように何気なく、学内の通信網全体の状態を調べてみると、その結果に対してタシユアは、変わったものを見つけた。

（企業に……交信要求？）

別にそれ自体がおかしいのではない。そこにたどり着くまでに使われている方法が、通常使われていないものなのだ。

もう少し正確に言えば、使われはするものの知っている者しかで
きない特殊な方法——つまり不正交信だった。

Episode : 07

お手並みを、しばらく拝見する。

(……?)

見ているうちにタシユアは、手口に微妙な違和感を覚えた。

方法そのものは学院内にいる、ある一人のそれと、非常に似通っている。だがその割に、スピードを含め技術が幼いのだ。

だいいちタシユアが思い描いている人物なら、こんな風にあっさり見つかったりはしないだろう。

(気になりますね)

少し調べてみることにする。

高スペックの自作機で、通信のパターンを解析して同期させると、内容と宛て先とが映しだされた。早い話が盗み読みだ。

いっぽうでタシユアはもう一台の魔視鏡で、学内を統括する思考石に潜りこむ。

読み取った宛て先がどの端末なのかは、すぐに割り出せた。手口から予想したとおりの部屋だ。

だがどう考えても納得がいかない。当人にしては、あまりにも技術が幼すぎる。

(そういえば、彼女には同居人がいましたか?)

同室の下級生がどうこうという話をしているのを、耳にした気がする。

(生徒の個別情報がある場所は、と……)

学院内の職員と生徒、全員の顔と名前を暗記しているタシユアだが、さすがに各人の寮の部屋までは覚えていない。というよりも、覚える必要がないと判断していた。

操作盤の上を踊るかのように、滑らかにかつ素早く指が動いてい

く。片方の魔視鏡で傍受と追跡を続けながら、もう片方で学院内の思考石に再度潜りこむ。

（しかし、二年前から全くセキュリティを変えない人間が、生徒にそういうことを教えてもいいのですかね）

最初から諦めているのか、それともタカを括っているのか、学院内の通信網のセキュリティはおざなりだ。

たしかに防護壁は何重にもかけられているのだが……その変更や更新がされない。だからいちど解析してしまえば、入り放題だった。

（つと、これですね……）

目的の記録を見つけ、部屋のから生徒を割り出す。

名前を見た瞬間、思い出した。ルーフェイア・グレイス、昼間の少女だ。

あの外見や態度から、まさかこんなことをするとは思っていなかったが、まあ教師に恵まれたということなのだろう。手口がよく似ているのもうなずけた。

なにしろ同居人は、この手のことなら学内でも五本の指に入るかというと、ロアだ。

（どうりで技術が幼いわけですね）

納得しながらも、さてどうしようかと考えあぐねる。

傍受して中身を見ているのだが、大した情報は得られそうにもなかった。まだ練習段階なのだろう、このぐらいなら自分で探した方がよほど早い。

（これ以上見ても仕方ありませんか……おや？）

タシユアの表情がわずかに変わる。

Episode : 08

傍受したものの中に、通信石の番号を直接打ち込んだものがあった。普通にはやらない方法だ。

（何をする気なのやら）

思うのとはほぼ同時に、指が動いて検索をかける。しかし引つかかってこない。

だが幸い追跡させておいた方から、場所を特定ができた。

「これは……！」

普段はどんなときでも冷静なタシユアだが、さすがに驚愕の色を隠しきれなかった。

打ちこまれたのは世界中の軍関係者が、熱望してやまないものだったのだ。

（シユマー……彼女のはあの、シユマーの関係者だったのですか）

その筋では伝説にもなっている、シユマー家。

代々傭兵をし、子弟を戦場で育てるといふ曰くつきの家系だ。それ以外にも数々の兵器や武器防具を開発している等、噂は尽きない。だが裏の存在ということもあり、実態はようとして知れなかった。その内部通信網が、目の前にある。

（まさか、こんなところでお目にかかれるとは）

だが、そこに若干の気のゆるみがあったらしい。

その相手——どう考えてもルーフェイア——が、入らずに移動した。

（おや、追跡しているのがばれましたか？ まあ、場所はわかりましたから、かまいませんか。

お礼に少し、遊んで差し上げましょうかね)

場所さえわかっていれば、いつでも解析や傍受等は可能だ。タシユアの腕なら、もう入りこんだも同然と言えた。いったんシュマーのほうは諦め、追跡にかかる。

例の相手は、転々と場所を移していた。だが、その速さはけして抜きんでたものではない。なにより、このように追われるのはおそらく初めてなのだろう。痕跡を慌てて消しているのが見て取れた。行動もまだ単純で、簡単に先が読める。

(ここからですと……なるほど、あそこのルートを使いますか) 次に使うルートを予測したタシユアは、追跡の手をいったんゆるめ、行き先に罫を張る。

案の定、相手はその罫にかかった。

(まあ、こんなところですかね? なにより収穫がありましたし) ものはついでと、おそらく震え上がっているかの少女の端末に、メッセージを送りつける。普通なら危険な方法だが、あの程度の腕ではとてもここまでは、逆探知できないはずだ。

そこまでしておいて、タシユアはあらためてシュマーの内部へ入りこむべく、本格的なアクセスを開始した。

Episode : 09 実力

R u f e i r

例の事件から数日過ぎて、野外訓練が始まった。春も過ぎて暖かくなると、この訓練が本格化する。

内容は、学年によって違うらしい。あたしのところだと、今年でやっと偵察を教わるくらいだ。

ただ今日は人数が足りないとかで、急遽上の学年の訓練に編入されたから、わりと本格的だ。

もっとも実戦って、訓練とは桁違いだけど……。

「えっと、今日って、インドア？」

「らしいな。昨日先輩に聞いたら、そう言ってたぜ」

ようするに屋内ってことなんだろうけど、じつはあたし、インドアはあんまり経験がない。

「イマドはやったこと……あるの？」

「二回だけ、まねごとならな。人数足りねえって、去年の夏前に放り込まれてさ」

なんかしょっちゅう、こういう人数調整はあるみたいだ。

「何、したの？」

「あんどきゃただの、見張りだったからなあ。つか下の学年が行ったって、そーゆー場所つきや回さねえよ」

「そうなんだ」

その辺は学院側も、ちゃんと考えてるらしい。

イマドがわりと簡単に、いっしょに参加する話になったのも、これで分かった。経験があるなら話は別だ。

ほんとうのことを言うと、最初はあたしは断った。けど教官が何

度も頼んできて、最後に「イマドもいつしよに参加させる」と言うてきたから、OKしたのだ。

「学院って、野外は少ないの？」

「先輩の話じゃ、半々って感じだなー。まあうちの先輩たち、けっこう警護とかの依頼、来るしな」

たしかにシエラからの傭兵は、警備みたいなことまでこなすので有名だ。だからこの手の訓練も、よそと比べたらずっと多いんだろう。

しかも今回は、ちゃんと上級生と組んでやることになっている。

つまりただ単に突入するだけじゃなくて、上級生にとっては「どれだけ部下を上手く使えるか」、あたしたち下級生にとっては「上官の命令をどれだけの確にこなせるか」まで、見られるってことだ。

「どの先輩と当たっかな」

「あたしに、聞かれても……」

でも誰と組むかは、あたしもけっこう心配だった。世の中意外だけど、相性で物事が左右されることは、思ってるより多い。

そうこうしているうちに、班分けの発表が始まった。

次々と名前が呼ばれていく。

「俺ら最後だろな」

「そう、思っ」

そんな話をしたら、ロア先輩を見つけた。向こうもあたしが分かっただけで、手を振ってくれた。

Episode:10

「ロア先輩♪」

急いで駆け寄った。先輩と一緒にの班なら、何かとやり易くていい。

「よろしく、お願いします」

「それがさ、ルーフェイア……」

けど先輩、なぜか困りきったような顔をする。

「あの、先輩？」

「あのね、キミの相手……」

——あれ」

先輩が向こうを指差した。

そして指差された人物が、振り向く。

「げ、マジかよ」

イマドのひとことが、すべてを物語っていた。自分が青ざめるのがわかる。

編んだ銀髪。眼鏡の奥の紅い瞳。

——どうしよう。

あたし何日か前、この先輩に怒られたばかりだ。

「タシユア＝リユウロンです。よろしくお願いします」

タシユア先輩は、この間のことなど忘れているかのように挨拶をしてくる。

もしかしたら本当に気にしていないのかもしれないけれど、その冷たい表情からは、何も読み取れなかった。

「あ……は、はい。こ……こちらこそ、よろしくお願いします……」
声が震えないようにするだけで精一杯。

けれこの先輩は、何事もなかったふうだ。

「ルーフェイア・グレイスとイマド・ザニエスですね？ 六年生ですか」

「は、はい。人数が足りないとのことで、急遽……編入に、なりました」

タシユア先輩が、納得したような顔をする。

——あたしが内心震え上がってること、気づいてるんだろうか？
たぶん気づいてるだろう、根拠はないけどそう思う。

「まったく、学院もこんな形で数合わせをするくらいしか、能がないのですかね」

このあいだのときと同じように、痛烈な言葉が飛ぶ。

「まあ、ここで言っても仕方ありませんか。

とりあえず訓練の開始は……24分後ですね。それまでに、大まかな状況を説明しておきましょうか？」

なにがあっても変わりそうのない、冷然とした態度。

先輩が見取り図を広げた。

「いいですか？ これが突入する建物の簡単な見取り図です。あとが入ってから、逐次確認して行くしかありませんね。

この建物の突入口は、だいたいこの三ヶ所。うち私たちが使うのは、ここです」

「あれ？ 俺ら見張りじゃないんです？」

イマドが平然と、先輩の説明に口を挟む。こういうところは、彼はすごかった。

「そのほうがよければ、そうしますが？ 教官からの指示はありませんからね。何もしなくても、点数だけはもらえるでしょうし」

「え……」

絶句する。

もしかしてこの先輩、教官からも疎まれてる……んだろっか？

Episode : 11

何も言われないというのは一見やさそうだけど、こういう状況でのそれはつまり、何も期待していないし何もするな、という意味になる。

加えて年下からの編入が二人、同じ班だ。
数は合わせて形だけは整えて、あとは黙って隅に居ろということなんだろう。

「まー学院の考えることなんて、その程度だろうなあ。けどこれで点がもらえるんなら、俺は別にいいけどな」

イマドはさつさと割り切ったみたいだ。

「どうします？」

あたしに問いかける先輩の瞳に、何かが閃いた。なんと云うか…
…そう、おもしろがっているような。

少し考えて答える。

「あの、あたし……やってみたい、です」

こういう訓練はあまりしたことないから、興味があつた。

「あたし、インドアの訓練……ほとんど、やってなくて。だから…

…」

「なるほど」

何かが腑に落ちたような感じを一瞬見せたあと、先輩は今度は、イマドのほうに問いかけた。

「あなたはどうなのです？」

「コイツがやるってなら、俺別に構いませんよ。もっとも俺じゃ、足引っ張んねーようにすんのが、せいぜいですけど」

イマドのこーいう、何でも言えるところは羨ましい。

「ではやりましょうか。教官が指示を出さないのですから、こちらが何をしてもいいわけですしね」

なんかちよつとだけ、教官たちが気の毒な気がした。

先輩がさっきの続きから、説明を始める。

「ここから突入した場合、敵側の拠点は恐らくここですから——最短経路はこれですね。まあ、行けるとは限りませんが。」

そしてこのルートですが、最初の関門はおそらくここです」

先輩の説明は、理路整然としての確だった。ルートや危険箇所が、次々と指摘されていく。

恐ろしい人だけど……この先輩、すごく有能だ。付いていけさえすれば、最短でクリアできるだろう。

「ざつとですが、だいたいこんなところですね。何か質問は？」

「あ、あの」

気後れしながら声を出す。

「あたし、さっき言ったとおり、インドア……あまり、してなくてアウトドアと比べて……特に注意する点とか、ありますか？」

「そうですね。当然と言えば当然ですが、インドアの方がトラップを仕掛けやすいのと、待ち伏せが簡単です。これはよく注意してください。」

それから階段も要注意ですね。特にうっかり下から駆け上ろうとすると、狙い撃ちにされます。まあ、やれば分かるとは思いますが——おや、そろそろ時間ですね。移動しましょうか？」

Episode : 12

よく分からないけれどこの先輩、足を引っ張るようなことをしたら、あっさり見捨てられそうな気がする。

そんな無様なマネだけはしたくなかった。

たぶん生まれて初めて、緊張しながら持ち場につく。

深呼吸して頭の中を空にする。

5秒前……4……3……2……1……。

開始の合図が、辺りに響く。

直後、いっしょに待機していた一チームがいきなり突っ込んだ。

「何やってんだ、あいつら」

あんまりいろいろ気にしないイマドも、さすがにそんなことを言う。

あたしも同感だった。何が待ちうけてるのかわからないのに、勢いに任せて突っ込むなんて、無謀もいいとこだ。戦場でそんなことをしたら、命が幾つあったって足りない。

案の定仕掛けてあったトラップが発動して、光石——魔石に光の魔法を込めたもの——が発動した。ほんとうなら殺傷力のある爆薬や石が仕掛けられているところだけど、まさか訓練でそれは出来なから、たいていこの石が代わりだ。

ともかく、これで一チーム脱落。

「まったく。これだから無能な指揮官は困りますね」

相変わらず冷たい声で、タシユア先輩が言う。

「ですが、無能な味方は敵より怖いと言いますし。丁度よかったのかもしれない。」

さて、行きましようか」

先輩、厳しい。

「あ、俺行きます」

なんだかやけに気楽な調子で、イマドが建物の入り口へと近づいた。

と、ふつと立ち止まる。

「こんなつまらないもん、仕掛けるなつての」

妙に憤慨したような調子で言うとな、ひょいとトラップを解除した。

――意外。

しかもついでに、解除して手に入れた光石を、きっちり中へ投げ込んでいる。

閃光。

「ふむ。意外にやりますね？」

あくまでも冷静に、先輩は評した。でも確かにこれなら、斥候はイマドに任せた方がいいかもしれない。

向こうでイマドが手を振った。入り口までは安全だ、ということらしい。

「行きますよ」

「あ、はい」

慌てて先輩の後ろに続く。

「様子はどうですか？」

「すぐ中にいたチームはリタイアです。ただ、それ以上奥まではわかりません」

ぴつたりと壁に張り付いて、中の様子をうかがう。

「――平気よ。気配がするのは、上の階だから」

気がつくともう、あたしは口にしていた。

また、先輩の瞳に一瞬、不思議な光が浮かぶ
なぜかぞっとした。
すべてを、見透かされているような気がする……。

Episode : 13

あたしたちのチームは順調だった。

もつともこれは、イマドの力が大きい。意外なことに彼、トラップや鍵の解除に相当長けていた。なにしろツールを使って、思考石を使ったもので解錠するのだ。

——でも、どこで覚えたんだろう？

ともかく守備側が仕掛けたトラップを次々とイマドが解除し、そこをあたしとタシユア先輩が突破する形で、かなりの短時間でそうとう奥まで来ていた。

「恐らくこの階段の上の部屋が、守備側の拠点でしょうね」

「はい」

それにしてもこの先輩、できる。

単に強いというのではなくて、戦闘のコツを飲み込んでいるというんだろうか？ 一種あたしの動きに似ているものがあつた。

「さて、今度はどう行きますかね……おや」

「なんだ、やつと雑魚でもきたのか？」

奥から声と共に出てきたのは、知らない先輩だった。でも確か、ロア先輩たちより年上で、上級傭兵の資格を持っていた気がする。

「ほら、出てこいよ。隠れてたって何にもならねえぞ」

なんだか挑発してるらしい。けど当のタシユア先輩は、完全に無視だ。

そしてあたしたちに背を向けたまま、話しかけた。

「しかたありませんね。とりあえず私が彼をおびきだします。

その間に、あなた方はあの下級生2人を切り抜けて、場所を確保していただけますか？」

「場所を確保するだけでいいんですね？」

いちおう、確認する。

「それで構いません。ここの奥はおそらく本丸ですから、全員で行く方がいいでしょう。」

場所を確保して待機。命令です」

「了解」

あたしとイマドの声が小さく重なる。

「では行きますか。あまり気は進みませんが」

そういつて廊下の陰から、タシユア先輩が出た。

「ほお、おまえか。ともに訓練に参加するなんざ、点でもヤバくなつたのか？」

だいいち、いつもこそそ逃げてくヤツが俺の相手しようなんざ、10年早えな」

「別に逃げた覚えなどありませんよ。レベルの低い方とは、付き合いたくないだけです」

こんどはタシユア先輩が挑発する。

でもこれ、ほんとに意識してやってるんだろっか？

まさか、無意識に言ってるなんてことは……。

「フン、ホネなしの割には言うじゃねえか。もつともお前じゃどうやったって、俺様の相手には役不足だがな」

「おやおや、自ら格下と認めるとは随分と殊勝な心構えですね。それに免じて見逃して差し上げましょうか？」

まるで教官が生徒に指摘するような、馬鹿にしているようにも聞こえる口調。

「誰が格下なんて言ったんだ？ おまえの耳は節穴か？」

「自分の間違いにも気づかないとは、それでよく上級だなどと言えますね。言葉は正しく使わないと、恥の上塗りになるだけですよ。もっともあなたでは、いまさら塗るものもないかもしれません」
この言葉に、相手の先輩が逆上する。

Episode : 14

「てめえっ！！ ぶった切ってやる！！」

一気に階下へ飛び降りてくる。

でもタシユア先輩は、冷静なまま。ちよつと練習試合でもするよ
うな調子で、得物の両手剣——光をまったく反射しない、漆黒の刀
身をしている——をすつと持ち上げたただけだ。

そしてあたしたちの方に視線を投げた。

もちろん意味なんて、聞かなくても分かる。

あたしとイマドは一瞬互いに視線を合わせると、守備側の死角に
なる位置から、階段の下へと動いた。

一方でタシユア先輩は、ここから離れる方向へ、上手く相手の先
輩を誘導していく。

難関はこの階段。

「先に俺が」

短く言って出たイマドを、とつさに防御魔法で援護する。けど何
か魔法でも使ったのか、こんな狭い場所で彼の姿を見失った。

敵側もそれは同じだったみたいで、大きな隙が出来る。

これを逃す馬鹿はいない。あたしは一気に階段を駆け上がった。

向こうが我に返って武器を構えたときには、あたしはもう肉薄し
ていた。

一閃。

強烈な峰打ちを食らって、ひとり倒れる。けどそれは最後まで見
ずに、あたしは身体を入れ替えた。

後ろを取ったつもりでいたもう一人の先輩の長剣が、空を切る。

——あたしの後ろを取るなら、せめて気配くらいは消さないと。

そして太刀をもう一度振るおうとした時、相手の動きが止まった。倒れた後ろには、イマドの姿。

「すごいこと……するね」

まさか後ろから襲うとは、思わなかった。

「訓練だからって、氣い抜いてるヤツが悪いんじゃないか？」
平然と言い放つ。

——イマドって思ってたより、凄い性格かも。
でもとりあえずこれで、場所の確保はできた。

あとはタシユア先輩が戻ってくるのを待つただけだけど、いった
いいつ頃……。

「綺麗に片付きましたね」

「——っ!!」

真後ろから先輩の声がして、あたしは心臓が止まるほど驚いた。

「おや、どうしましたか？」

また、タシユア先輩の瞳に光が閃く。まるで猫が、つかまえた鼠
をおもちゃにするような……。

ぞつとする。

あたしだって戦場育ちだ。後ろを取られるのがどのくらい危険か
は、骨身に染みて知っている。

だいいちそういう環境で育ったから、あたしの後ろをとるのは傭
兵の両親にだって出来ない。

——それなのに、この先輩は。
もしこの先輩を敵にしたら、あたしは確実に死ぬだろう。
寒気がした。

Episode : 15

結局訓練は、あたしたちのチームが守備側の拠点へ突入して終了した。

とてもスムーズで、最短記録だったらしいから、教官も文句はつけられないだろう。

終了のホイッスルが鳴り、自主解散になる。

「ではこれで——おや、下級生にはなにか伝達事項でもあるようですね」

「あ、俺行ってくるわ」

先輩の言葉に、イマドが動いた。

二人だけになる。

「そつえばあなたに、お礼を言わなくてはなりませんね。おかげで今日の課題は、ほぼパーフェクトでしたから。」

——さすがに、戦場育ちというだけのことはあります」

「え？」

一瞬耳を疑った。

あたしが戦場で育ったのを知ってるなんて、この先輩いったい…

…？

けど、次の言葉はもつと恐ろしいものだった。

「さすがは死神たるグレイス姓を、名乗るだけのことはありますね。いえ…：ルーフェイア「グレイス」シユマー、とお呼びした方が正しいですか？」

この一言に、あたしは凍り付く。

本来誰も知るはずのない、「シユマー」の姓。これを学院内で知

っているのは、学園長とロア先輩、それにイマドだけのはず。
そしてそれ以上に、「グレイス」に込められた意味。これは学院
では、あたし以外誰も知らない。

「……どうして、それを……？」

ようやく出てきた問いに対して、タシユア先輩は冷たい笑みを浮かべた。

抜き身のあたしに対して、タシユア先輩は剣に手さえかけていない。まるで動揺するあたしを、嘲笑するかのようだ。

恐怖。

普段は心の奥底へ抑えつけているはずのそれが、あたしの中に湧き上がってくる。

——かなわない。

この先輩には、あらゆる意味で今のあたしでは、とても太刀打ち出来ない。

太刀を握る手に汗がにじんだ。

空気が張りつめる。

けど、その緊張が破れることはなかった。

「おい、ルーフェイア、俺らは集合だつてさ」

様子を見に行つてたイマドが、あたしを呼びに来る。

そしてそれが合図だったかのように、すつと先輩は動いた。

「では、またいずれ。」

——そうそう、背中には気をつけたほうがいいですよ？」

それだけ言うと、何事もなかったかのように静かに、あたしのそばを通りすぎる。

足音どころか気配さえない。

でも。

(こね……?)

Episode : 16

そう、知ってる。

あたしと同じ……『戦うために生み出された』者のもつ匂い。初めて他人から感じた死神の匂いに、またぞつとする。

先輩の後ろ姿が遠ざかるのを見て、ようやく緊張が解けた。立っていらなくて、思わずそこへ座りこむ。

まだ、身体の芯が凍り付いたままだ。

「なにかあつたんだな？」

「あの先輩に……全部、知られた……と思う」
やつとのこと、イマドにそれだけ答える。

「よりによつて、タシユア先輩にかよ」

彼の言葉は、まるで吐き捨てるような調子だった。

でもあたしにも、なんとなく意味がわかる。よくは分からないけれど、おそらく学院内でいちばん、知られたらまずい相手だ。

そして、はつと気づく。

「まさか、あの、追いかけてきた——？」

「追いかけ？ 何の話だ？」

例のことは知らないイマドが、不思議そうな顔をした。でもあたしの中で、はつきりと線がつながる。

数日前あたしを追いかけてきた、“誰か”。あれほどの腕をした人間が、そうそう学内にいるとは思えない。

そして、あたしの素性を知るタシユア先輩。

二人が同一なのは、おそらく間違いないだろう。

だとしたらあの先輩はもう、シユマーの中へ入り込んで。自由に情報を、盗み出すところまできてる。

証拠はない。ただの推測だ。でも先輩が言った言葉は、そうでも考えないと、説明がつかなかった。

もちろん他のどこから、情報を手に入れた可能性はゼロじゃないけど……ゼロじゃないってだけで、限りなく低い。

だからおそらく、シューマーそのものからだろう。吐き気がした。

これほどの恐怖を感じたのは、もしかすると初めてかもしれない。

「だいじょぶか？　かなり顔色悪いぞ」

「だいじょぶ……だと、思う」

そう言って、やっとの思いで立ち上がる。

自分でも信じられないほど、足元が危なかった。

「歩けっか？」

「うん……どうにか」

答えて、あたしはイマドといっしょに、集合場所へと歩き始めた。

Episode : 17

「ええ〜！ よりによって、あいつに知られたわけ?!」

部屋へ戻ってきたロア先輩に昼間のことを言つと、イマドとほとんど同じリアクションをした。

「やっぱり……まずいですか?」

「多分学院内じゃ、いちばんヤバイ相手だね」

それを聞いて、気が重くなる。もしこれで家になにかあつたら、完全にあたしのせいだ。

ともかくことの次第だけは連絡しようと、端末を立ち上げる。その時、ふと思いついた。

「ロア先輩、タシユア先輩のラストネーム、リュウローンですよね?」

「そだけど?」

ロア先輩、タシユア先輩と同じクラスなだけあつて即答する。

リュウローン。その名にあたし、聞き覚えがあつた。たしか、どこかの研究者と同じだ。

その人はもう亡くなつてて、でも子供向けに易しく書いたこの人の本を、読んだことがある。

あと、研究にまつわるおかしな噂を、ファールゾンから聞いたことがあつた。

それがとても……気になる。

それも踏まえてざつと経緯を書いたうえで、問い合わせ事項も付け加えて、伝言を魔視鏡から送ろうとした、その瞬間。

「だめっ、ルーフェ！ そっち監視されてる!!」

「え……！」

思わず驚いて、魔視鏡から手を離れた。

ロア先輩が隣の自分の機で、なにやら操作を始める。

「つたく、どこまで根性ひん曲がつてんだか……あ、逃げられた！」
先輩が悪態をつきながら立ちあがったけれど、あたしはもう聞いてなかった。

身体が冷たくなる。

怖い。

まるで心臓を掴まれたみたいだ。

「ルーフェ？」

あたしの様子に気がついたらしく、先輩が声をかけてくる。

けど、答えることさえ出来ない。

訓練のときみたいに、また吐き気がして、あたしは口元を抑えた。

「ちょ、ちょっと大丈夫？ 気持ち悪い?!」

先輩の慌てた声。

「立てる？ こっち来て……ほら、いいから吐いちゃって」

抱えられるように連れて行かれた洗面所で、あたしは吐いて倒れた。

Episode:18

I m a d

野外訓練が終わって自室へ戻ったあと、俺はどうにも落ち着かなかった。すつげえやな予感がしてしょうがない。

あの訓練が終わったときのルーフェア、ただことじゃなかった。倒れるんじゃないかと思ったくらいだ。

——行ってみつかないかな。

ともかく気になる。

ただ、女子寮へ行くのはちとしり込みだった。

昼の間なら、受付のところでちゃんと言えば入れてもらえっけど……傭兵隊の資格持つてねえのに行くと、あとで教官に呼ばれるのがパターンだ。

それでも結局、俺は部屋を出た。なんかよく分かんねえけど、ルーフェアのほうからなんか、聞こえる気がする。

あいつの部屋は、渡り廊下挟んだ女子寮の三階だ。

けど部屋どころか、向こうの受付まで行く前に、意外な先輩と出くわした。

「ロア先輩？」

なんか、やけに慌ててる。

「あ、キミ、ちょうどいいや。ちょっとムアカ先生呼んできて！」

「なんかあったんです？」

やな予感的中したっぽい。

「うん、ちょっとルーフェアが倒れちゃってさ……あ、ちょっと！」

聞いた瞬間、俺は走り出していた。受付とかそゆのぜんぶ忘れて、あいつの部屋へ飛び込む。

「ルーフェイアっ！」

呼ぶと、その声にあいつが反応した。

「イマ……ド……？」

弱々しい声。

顔色も悪いとか通り越して、真っ白に見える。

「どした!？」

「……怖い……」

こんなにおびえたルーフェイア見んのは、俺も初めてだった。
理由はどう考えたって、“あれ”だろう。

——まったく、何考えてんだよ！

あの先輩の毒舌冷酷自分勝手は、そりや今に始まったことじゃない。けど、相手考えろと思う。

ルーフェイアが脆いのなんざ、見りや分かるだろうに。

Episode : 19

「だいじょぶか？」

こんなことつきや言えねえ自分に、いちばん腹が立った。

「ゴメン、俺ってばなんも役に立ってねえな」

ルーフェイアのヤツが、かすかに首を振る。

「行かない、で……」

「分かった」

俺が間髪入れずに答えると、コイツの表情が少しゆるんだ。

「急患はどっちなの」

「ボクの部屋です！」

むこうから、慌しい足音と話し声とが聞こえてくる。

すぐに勢いよくドアが開いて、ロア先輩とムアカ先生とが入ってきた。

「あらま、ここは女子寮だと思ったけど」

「え？ あ、すいません」

勢いで女子寮突っ込んだの、やっと気がつく。

けどルーフェイアのヤツにああ言っちゃった手前、出てくわけにもいかねえし。

「ほら、あなた早く男子寮へ……ってなるほど、そういうことね」
涙ためて見上げるこいつの様子で、ムアカ先生も事情を察したらしい。

「しょうがないわね。今晚だけは特別に許可するから、この子の隣にいてあげなさい。」

——で、とりあえず診察したいんだけど？」

「あ、はい」

さすがにこれはヤバいから、ロア先輩と二人、寝室の外へ出る。

「先輩、なにがあっただんですか？」

いちばん聞きたかった質問を、俺は先輩にぶつけた。

「それがさ、ボクにもよくわかんなくってね。あの子がネット上だろうとして、誰かが監視してるのに気づいてさ」

多分タシユアだろうけど、とロア先輩が付け加える。

「そしたらいきなりルーフェイアが吐いて、倒れちゃったんだ」

「そうだったんですか……」

引き金は、昼間の話だろう。たしかルーフェイア、「タシユア先輩にぜんぶ知られた」って言ってたはずだ。

それで参ってたところへ、そのご当人に監視までされて、一気にいったっぽい。

思わず壁を叩いた。

「き、キミ、分かったから落ち着こうよ」

「……すみません」

そんなやり取りしてたら、ムアカ先生に呼ばれた。

「もついいわよ。呼んでるから、ここに居てあげなさいね」

「あ、はい」

許可もらって、こいつの部屋へ入る。

おつくつらしくて視線だけで俺を見上げたルーフェイアは、こないだまで同居してた先輩の妹みたいに、小さくて頼りなかった。

Episode:20

そのまま、数日過ぎた。けどルーフエイアのやつは、ぜんぜん良くない。

ムアカ先生も最初は「ストレスだから数日寝てれば」ってたけど、ルーフエイアはなんせ脆いから、そんなじゃ済まなかったっぽい。いまもほとんど、何にも食えないまだ。

んでどうしようもなくて、けっきょく診療所に引き取られてる

俺とかロア先輩とかシーモアたちとか、なるたけみんな顔出して診療所居るようにしてっけど、はつきり言ってるなんの役にも立ってねえし。

早い話、原因になっているコトを取り除きやいいんだろっけど…これがいちばんハードル高いから困る。

なにしろ相手ときたら、「あの」タシユア先輩なわけで。

どうにか上手くここまで連れてきたにしても、ルーフエイアのヤツと引き合わせたが最後、事態なんてよけい悪くなりそうだ。

「先生、どうにかならないんです？」

「そうは言われてもねえ」

ムアカ先生が肩をすくめる。

「なんとかしてあげたいんだけど、どうにもならないわ。半分は性格なんだろっけど、ともかくよほどひどいストレスになってるみたいだし」

「そうですか……」

うとうと寝入っているコイツ、少しやつれて見える。

乱れて顔にかかっている金髪をそつと払いのけてやると、ルーフエイアは目を開けた。

「わりい、起こしちゃったな。気持ち悪くねえか？」

「……うん」

まだ食べ物は受けつけねえけど、今朝辺りから少し、良くなってきてんのかもしれない。

「今日って……お天気、いいね」

そう言って何日かぶりに、ルーフェイアのやつが自力で、起きあがろうとする。

「ムリすんなよ」

「……起きたい、から」

それ聞いて、マジでほっとした。これなら、あとはだんだん回復すんだろう。

窓を開けてやる。

「あ、気持ちいい」

吹き込んできた風に、金の髪がなびいた。

久々の笑顔。

その笑顔で俺がどれだけ安心したか、コイツには——たぶん分かんねえだろう。

「少し、外でも出るか？」

「……うん」

ムアカ先生のほう見ると、年のわりに案外気が強ええこの人がうなずいた。少し外へ連れてって、気分転換させてこい、ってんだろう。

着替えて立ちあがったルーフェイアも、思ったよりはしっかりしてた。

そつと歩き出したコイツに歩調合わせて、玄関出て、船着場まで連れて行く。

ルーフェイアは海が好きだ。ときどき用事がなくてもこいつ、出

かけちや 棧橋に座り込んでるの、俺も知ってた。
今も久しぶりに海見て、こいつの顔がほころぶ。

「どする？ ケンデイクまで行ってみつか？」

「そうだね……あの街、見たいな」

念のためにこっそり、通話石通してムアカ先生に訊いたら、行つていいって答えが返ってきた。思ったよりしつかり歩いてたし、気晴らしになるから好きなだけ行かせたほうがいいって言う。

「じゃあ、そうすつか」

「……ありがと」

足元に気をつけながら、俺らちょうど来てた連絡船に乗り込んだ。

Episode : 21

R u f f e i r

ふっと目が覚めた。

イマドが心配そうな顔でのぞきこんでいる。
目が合うと、静かな声で聞いてきた。

「気持ち悪くねえか？」

「……うん」

ここ何日か吐き気がして食べられなかったのを、彼はずいぶん心配していた。

でも今日は少し、身体が楽だ。

窓の外は、数日ぶりに雲一つない青空だった。

「今日って……お天気、いいんだね」

腕に力を入れて起き上がろうとしたら、なんだかめまいがした。

「ムリすんなよ」

「……起きたいの」

よく分からないけど、あの空を見ていたら、そう思った。

きつと外へ出たら、気持ちいいだろう。

イマドが察してくれたみたいで、窓を開けた。

「あ、気持ちいい」

吹き込んでくる風。

ちよつとだけ心が軽くなった気がする。

「少し、外でも出るか？」

「……うん」

もしかしたらムアカ先生に止められるかと思ったけれど、あっさり許可が出た。

なんだか安心して、着替えて立ちあがる。足元も、思ったよりはしっかりしてた。これなら少し、遠出できるかもしれない。

そつと、歩き出す。イマドがペースをあわせて、ついてきてくれた。

いつもよりずっと長い時間をかけて、船着場までの坂を下る。

遠く遥かに広がる、碧い海。

いろいろな想いが、その碧の中に溶けていく。

「どする？ ケンディクまで行ってみつか？」

「そうだね……あの街、見たいな」

あの青い街。大好きだ。

時々あたし、用事がなくても出かけて、散歩したり港で海を眺めたりしてる。

「んじゃそうすつか」

「……ありがと」

ちようど来ていた連絡船に、用心しながら乗り込む。さすがに五日も寝てたから、気を抜くとふらつきそうだ。

窓際の席に座る。

船が出て、景色が動き始めた。

このあいだ来た時よりもまた、緑が濃くなっている。陽の光の下で輝く緑は、なんだか涙がでそうに綺麗だった。

Episode : 22

船体が碧いうねりの間で揺れる。

青と白の街が近づいてくる。

「だいじょぶか？」

久々に外へ出たのを心配してるみたいで、イマドが声をかけてきた。

「うん。思ってたより、調子……いいみたい」

「そか」

長居はムリだろうけど、あの埠頭から海を眺めるくらいはできそうだ。

少し元気が出てくる。

やがて、船が止まった。

揺れる足元に気をつけながら降りて、歩き出す。

いつもと同じ、青い街。

風に混ざる潮の香。

シエラの船着場は入り江の中で、外洋はあまり見えないけど、ここは視線の先にどこまでも碧が広がる。

「きれい……」

穏やかな風、穏やかな海。

見てると気持ちが悪く落ちて着いてくる。

「あの先まで……行って、いい？」

「気をつけるよ？」

いちばん好きな、埠頭の先まで行ってみる。

近くで覗くとこの海、びっくりするほど透明度が高い。底まで見

えて、きれいな魚が横切って行く。

「ねえ、しばらくここにいて……いい？」

「ああ。そしたらなんか飲むか？ 買ってきてやるよ」

「……ありがとう」

待つてると言って、イマドは向こうの店のほうへ駆けて行った。
ひとりになる。

でも不思議と、あたしは落ちついていた。ここ数日の落ちこみが、
嘘みたいだ。

——この海のせい、なんだろうな。

ぼんやりとそんなことを思った。

明日もまた、来てみようかな？

でもイマドはそうそう、あたしに付き合ってはもらえないだろう
し。

ゆらめく水面に手もとの石を投げると、ぽちんと沈んで輪を描
いた。

それがなんだか、可笑的い。

端からみたらきつと変に見えるだろうけど、なんとなく笑みがこ
ぼれた。

と。

(なに……)

なぜだろう。何かの、予感。

ぞつとして、あたしは振りかえりつつ立ちあがった。

Episode : 23

Tasha & Sylpha side

「すまない、つき合わせてしまつて」

「別に構いませんよ。私も用がありましたし」

ケンデイクの街を、2人の男女が歩いていた。

ひとりはずややかな長い黒髪に、紫水晶の瞳をした女性。

もうひとりは三つ編みにした長い銀髪と、紅の瞳をした青年。

どちらも長身で、しかも美男美女だ。通行人も、かなりの人数が立ち止まっては振り返っている。

だがこの2人、もし学院の生徒が見たなら避けて通るだろう。

女性の方はまだ「可愛げがない」程度で通っているが、この青年となると「学内で並ぶもののない毒舌家」との評価なのだ。

——言わずと知れた、タシユアとシルファだった。

そうしよっちゅうではないが、街でしか手に入らないものを買いに、こうして2人でケンデイクの街へ来ることはある。

「そつえば……」

言いかけて、シルファは口をつぐんだ。自分としては気になる噂を聞いたのだが、それをタシユアに言っても意味がないような気がしたのだ。

「なんですか？ 途中で止めたりして」

「いや、たいした話じゃないんだが……この間タシユアが野外訓練で一緒になったルーフェアという子、倒れたそうだ」

「それは初耳ですね」

一瞬、タシユアは不審に思う。

訓練が崇つて生徒が倒れることは時々あるが、去年の夏に中途入

学した彼女——ルーフェイア「グレイスに限っては、まずそんなことはないだろう。なにしろあのシユマー家が誇る、最強の戦士なのだ。」

とはいえまだ、彼女が11歳でしかないのも事実だ。身体が出来あがっているとは言い難い。

「単に疲れでも溜まったのではないですか？」

それよりシルファ、早くしないと日が暮れますよ。今日は買うものが多いのでしょう？」

「そうだな」

もう何年も歩いて慣れた街を、手早く回って行く。ひととおり揃え終わった頃には、それなりの包みを、シルファはタシユアに持たせていた。

「これでぜんぶですか？　なら、戻りましょうか」

「ああ」

うっかり港側から回ったため、帰るにはもういちど街を横切らなくてはならない。

「反対から回るべきでしたかね？」

言いながらタシユアは歩き始めた。シルファもなにも言わずについてくる。

足を向けた港は、いつものように穏やかだった。よい天気誘われたのだろう、けっこう人が出ている。

と、すっとタシユアが立ち止まった。

「シルファ、先ほどの噂は本当なのですか？」

「聞いた話だから……どうかしたのか？」

そう尋ねたシルファだが、タシユアが答えるより早く意味を知ったようだ。

埠頭のところにいる金髪の少女は、どうみてもあのルーフェイア

だった。

「嘘だったのか」

「単純に回復しただけかもしれませんが。おや、気づいたようですね？」

少女が振り返りながら、立ちあがる。

Episode : 24

「またお会いしましたね」

何気なく——タシユアにとって先日の出来事は日常風景の一つでしかない——言ったのだが、少女の表情にあきらかな怯えが走った。

「い、いや……」

様子がおかしい。

「タシユア、なにか変じゃないか？」

「そうですね。」

——ルーフェイア？」

さすがのタシユアも声のトーンを、小さい子に話しかけるような、そういうものに変える。

だが少女は、さらに怯えただけだった。

「いや……来ないで……」

わずかにあとずさる。

どうみても、普通 of 精神状態とは思えなかった。このまま放っておくのは危険だと判断して、タシユアは少女に近づく。

「ルーフェイア、どうかしたのですか？」

それは普段のタシユアからは考えられないほど、穏やかな調子の声だったのだが、少女の反応はあまりにも唐突だった。

「いやあっ……」

叫ぶといきなり、踵を返して駆け出す。

だが、その先に足場はない。

華奢な少女の身体は宙に投げ出され——水面へと落ちた。

R u f e i r

立ちあがって振りかえった先、あたしの視線が捉えたのは――タ
シユア先輩。

と勝手に恐怖に襲われる。

「またお会いしましたね」

あの、冷たい声。

――怖い。

「ルーフエイア？」

――来ないで。

思わずあとずさる。

「ルーフエイア、どうかしたのですか？」

先輩が近づく。

「いやあっ!!」

思わず逃げ出した。

後ろへ。

「あ……」

いきなり足元が途切れる。

身体が宙に浮いた。

――落ちる？

次の瞬間、あたしの身体は海中に沈んでいた。

水底から見上げる水面が、奇妙なくらい綺麗だ。

――そうか、これで死ぬんだ。

不思議なくらい冷静だった。

でも考えてみれば、今までだって、生きてこれたのが不思議なく
らいだ。だからいつ終わったって、おかしくない。

それが今だっただけなんだろう。
息が詰まる。

そこで、あたしの意識は途絶えた。

Episode : 25

Al1

「いやあっ!!」

叫びを聞いて、イマドは振りかえった。

目に入った光景に、愕然とする。

ルーフェイアとシルファと——タシユア。

そしてルーフェイアは、海へと落ちるところだった。だがあの精神状態で落ちたら、まず助からない。

（なんでだよ!）

この成り行きに、イマドはかの先輩を絞め殺したいところだったが、まずはともかくルーフェイアを助けに走る。

が、さらに早く動いた影があった。

「タシユア先輩?!」

長身の青年は即座に上着を脱ぎ捨てると、鮮やかに海へ飛びこむ。ざんっ、と音がして、水しぶきがあがった。

やや遅れて、イマドとシルファが埠頭へと駆けつける。

「タシユア、大丈夫か?」

シルファが声をかけたときには、もうタシユアは少女を抱えて水面に頭を出していた。

「イマド、学院に連絡してください。それからシルファ、手を貸してもらえますか?」

てきぱきと指示を出し、シルファの手を借りながら海から上がる。瞬間、青年は怪訝な表情をした。

水の浮力がなくなったというのに、ルーフェイアは想像以上に軽

かった。この身体のどこにあれほどの戦闘能力が秘められているかと、不審に思えるほどだ。

このくらいの年齢——たしかルーフェイアは11歳——にはもう、タシユアやシルファはそれなりの体格に成長していた。だがこの少女はどう見てもまだ、子供でしかない。

そつと横たえてやると、少女が激しく咳き込んだ。

「どうなんだ？」

シルファが聞いてきた。その声に心配の色がにじんでいる。

「詳しくはわかりませんが……少なくとも呼吸はしていますから」「びしょぬれのまま、咳き込む少女の背をさすりながら、タシユアは答えた。

「氣を失ったせいで、さほど水も飲んでいないようですし、まあ大丈夫かと」

「そうか」

シルファがほつと息を吐いた。

だがタシユアはまだ、応急手当の手を止めない。

「どなたか毛布を貸していただけませんか？」

言いながら少女の服を緩め、氣道を確保する。

ここへ来てようやく、ルーフェイア瞳が焦点を結んだ。

「あ……いやっ！」

とつさに逃げ出そうとするが、今度はタシユアも予測済みだ。払いのけようとした手をうまく捕らえ、少女の身体を押さえつける。

「そんなに怖がらないでください。別にとって食べたりはしませんから。」

——息は苦しくくないですね？」

「あ……はい……」

まだ怯えながらも、ルーフェイアは返事をした。いくらか理性を

取り戻したようだ。

「そうですか。さあ、これにくるまって」

誰かが持つてきてくれた毛布で、こわばらせたままの身体を包んでやる。本当なら濡れた服を脱がせた方がいいのだが、ここでそれをやっては、いくらなんでも可哀想だろう。

そこへようやく、イマドが戻ってきた。

「先輩、学院に連絡——ルーフェイア、だいじょぶかつ?！」

その瞬間の少女の変化は、劇的だった。

「——イマド!」

少年の方へ手を伸ばす。同時にその身体から緊張が抜け、表情も安心しきったものになった。どうやらルーフェイアにとって、この少年はどんな精神安定剤より効果があるようだ。

抵抗をやめて扱いやすくなった少女を、抱き上げる。

Episode : 26

「ともかく学院に戻りましょう。二人とも、その荷物をお願いします」

連絡船にかけあつて臨時で本島まで行ってもらい、ルーフェイアを診療所へ引き渡した時には、すでに陽は傾きかけていた。

ちなみにタシユアとイマドの二人がムアカ——この若い女医は意外にも、こういうことだと厳しい——にこっぴどく怒られたのは、言うまでもない。

もつともイマドはともかく、タシユアはこたえた様子などまっただくなかったが。

「やれやれ、とんだ騒ぎでしたね」

まるで無関係のことに巻き込まれたといわんばかりのタシユアに、ついにイマドは噛み付いた。

「——もとをただせば、先輩のせいですよ!」

「どういう意味です」

問われて、少年はこの顛末を話し始める。

野外実習の時のこと、その晩寮で倒れたこと、そしてとうとう食べるものさえ、吐いて受け付けなくなってしまったこと……。

だが、タシユアは平然と返した。

「それがどうして、私のせいになるのです?」

正直な話、心外ではなかった。タシユアにしてみれば、ことさら何かをしたつもりはない。たしかにルーフェイアを追いかれたり、背後を取ったりしてみたが、目の前にそういう状態で居たから、というだけの話だ。

何がそんなに彼女を怖がらせ、あそこまでにしたのか、まったく

理解できない。

ただタシユアにも、少女が精神的に危険な状態にあるのは分かった。その辺から推測するに、こちらの何かに対して恐怖を抱き、過剰反応したようだ。

（それにしても、予想外でしたね）

シユマー家のグレイス姓を名乗るルーフェイアが、まさかこれほど脆いとは思わなかった。シユマーの名に、惑わされたのかもしれない。

後輩がさらに続ける。

「先輩なら、あいつがなんでここへ来たか、分かるんじゃないですか？」

その言葉に、タシユアは思う。

（私だけ、でしょうね）

あの場所に何があるのか知っているのは、この生徒では、自分とルーフェイアの二人だけだろう。

忘れたくても忘れられない、忘れるわけにいかないものしか、あそこにはない。

「だからせめて今くらい、そつとしいてやってください」

なおも何か言おうとする後輩との間に、シルファが割って入った。「イマド……だったか？ あとは私が、よく言っておくから。だから、あの子のところへ……行っては、どうだろう？」

シルファの提案に、まだ言い足りなさそうだったが、イマドは軽く頭を下げて去った。やはりルーフェイアのことが、気になるのだろう。

彼が行ったのを見届けて、シルファが口を開いた。

「まったく。だから言ってるだろう、いつも言いすぎだと」

「ふつうはあの程度で、あんなふうになつたりしませんよ。脆いにしても度が過ぎます」

タシユアが即座に言い返す。

もつともシルファは慣れっこで、さして気にする様子はなかった。

「だがああいう子が居ても、おかしくないだろう？　いろいろなのだし」

「確かにそうですがね」

そうは言っても、それで引き下がる彼でもない。

「あとできちんと謝ったほうが、いいんじゃないか？」

「事実を指摘しただけで、謝るようなことはしていませんが」
「やれやれ、という顔でシルファが軽くため息をつく。」

「ともかく、その……ケリだけは、つけたらどうだ？　あれではタシユアの顔を見るたび、また同じことになると思う」

「ですから、どこに付けるケリなどあると言うのです？」

なおも言い切るタシユアに、こんどこそシルファが諦めのため息をついた。

Episode : 27

Sylpha

大き目のドーナツ状の型から、いい匂いが立ち上っている。砂糖と、オレンジの匂いだ。

きちんと冷めたのを確かめてから、型に沿ってナイフを入れると、高さのあるドーナツ型のケーキが現れた。それを三段に切り分けて、一番上を型に戻す。

これとは別に途中まで作っておいた、オレンジのムースをその上に入れ、真ん中の段を戻し、またムースを重ね、最後に三段重ねになった。

あとは冷やして、飾り付けるだけだ。

——食べられると、いいんだが。

この新作のケーキは、あの金髪の子に持っていくつもりだった。

なんというか、あのまま放っておけない。

気になってあとから、いろいろあの一緒にいた少年に聞いてみたのだが……どうもタシユアのやったことが、クリティカルヒットしたようだった。偶然いろいろな条件が重なって、精神的に追い詰めてしまったらしい。

タシユアに悪気はない。彼はいつもああだし、あれでもいちおう筋は通っている。

あの少女が追いかけられたというのも、元をただせば無防備さゆえだ。図書室の件も理屈だけなら、あの子のほうが不用意だったと言っべきだろう。

だがそうだとしても、私には少しだけ、やりすぎなように思えた。どれも小さい子にはありがちなことだし、その場で柔らかに教える

方法だつてある。

まあそれをやるようでは、タシユアではないのだが……。

ともかくこのままにしておいたら、あの子はいずれ、ここに居られなくなるだろう。それがいちばん、私には苦しかった。

私は生まれてすぐ両親が亡くなり、親戚じゅうを次々とたらい回しにされた。どこへ行っても居場所はなく、いつも息をひそめて隅に居た。

目立たないように。見つからないように。追い出されないように。だからこの学院へ来たとき、心のどこかでほつとしたのだ。やっと自分の居ていい場所が見つかった、と。

金髪の子のことは、詳しくは知らない。だがやはり何か事情があつてここへ来て、やっと落ち着いたらしいことは分かる。だから、他人事に思えなかった。

あの、おびえきつた表情が忘れられない。

たしかにシエラはふつうの学校と違って、それなりの危険も厳しさもある。だが、あんなふうにおびえる場所ではないはずだ。少なくとも私は、ここへ来て初めて、居場所を見つけた。

だからあの子にも笑顔はムリでも、せめて落ち着いてここで過ごしてほしいと思う。

ただあの金髪の子は、あまり具合がよくないらしかった。そうでなくても弱っていたのに、まだ冷たい海に落ちたのがまずかったらしい。高熱が続いて診療所入院したままだと、同じクラスのデイトンヌが教えてくれた。

——このケーキで少しでも、元気になってくれるといいのだが。

そう思いながら、冷やす間に片づけをし、簡単なクッキーを焼き、飾りつけ用の道具や材料も揃える。

Episode : 28

ケーキは大成功だった。間のシフォンはまったくつぶれていないし、ムースもいい具合だ。

なんだか嬉しくなつて、仕上げのクリームをぬる手が弾む。

スライスした果実も乗せて、銀色の小さな砂糖菓子を星のように振つて、完成だ。

「……よし」

これを作ったのは初めてだが、我ながらよく出来たと思う。

———そういえば、味見をしてもらっていないな。

新作のケーキは、タシユアに食べさせて味を訊くのがいつもだ。

けれど今からもうひとつ作るわけにはいかないし、これをタシユアに食べさせたら、お見舞いに行く時期を逃してしまいそうだった。

仕方ない、と自分を納得させる。

だが用意しておいた箱に入れようとしたところで、タシユアが入ってきた。

もしかして、考えていたことがばれてしまったのかと慌てる。こういうことはなぜか、彼はカンが鋭かった。

「新作ですか？」

言いながらケーキを見た彼が、不思議そうな表情になる。どうやら単純にここへ来ただけで、私の考えていることを察知したわけではないようだ。

それに考えようによつては、かえつていいかもしれない。

「いつもとずいぶん、趣向の違うケーキですね」

「ああ。少し、変えてみた」

なにしろ年下の女の子向けだ。見た目もそういうふうにつけてあ

る。だがふだんはタシユアにあわせて、シンプルに作ることが多いから、彼にしてみれば珍しいのだろう。

「では、味見でも」

「ダメだ！」

とつさにケーキとの間に入って食べられないように防ぐと、タシユアがまた、怪訝そうな顔になった。

「どうしたのです？ 毒が入ってるわけでもないでしょうに」

「その、これはだから、人にあげるんだ」

「おや、それはまた珍しいこと」

私にあまりそういう相手が居ないことを、タシユアはよく知っている。

「今これを箱に入れるから……ちよつと持って、くれないか？」

「まあ持つくらいかまいませんが、どこへ行く気なのです」

「こんども不思議そうな彼に、「ちよつと」と答えながら、クッキ―も詰める。加えて本も何冊か持って、私は立ち上がった。

「ずいぶん大荷物ですね。本は持ちますよ」

――そう。

タシユアはけして冷たくない。ただ、それを周りが知ることはないだろう。

私の後ろを、彼がついてくる。

「……なるほど、そういうわけですか」

寮を出たところで、タシユアは行き先を察したようだ。

Episode : 29

「お見舞いとは、ずいぶん甘いですね、シルファは。そんなに甘やかして、どうするのです」

案の定、彼の毒舌が始まる。

「あのままじゃ、可哀想だろう」

「元を正せば、ルーフェイアのほうが悪いのですよ」

「だからお見舞いが、ダメなのか？」

「そうは言っていないでしょう」

まだタシユアの毒舌は続いていたが、どうせ言い合いではかなわないから、口をつぐむ。だいいち彼も口では言うが、ここでケーキを放り出して帰ったりはしない。

それよりも、ムアカ先生が入ってくれるかどうか、よほど心配だった。

そつと診療所のドアを開ける。

「あの……」

「どうしたの？ ケガでもした？」

言いながら顔を出した先生が、驚いた。

何をしに来たのかは、私たちの様子を見てすぐに分かっただろう。けれどそれをさせていいのか、考えているふうだった。

「困ったわね、気持ち分かるのだけど……」

先生が言いたいことは、私にも分かる。

確かに上手くいけばいいが、かえって事態が悪くなる可能性も高い。かといって、このままにも出来ない。

「そうですか、では私はこれで」

「ダメだ！」

先生の様子を見て、さつさと帰ろうとしたタシユアを、強引に引き止める。何とかしなければならぬし、それをやるのは、今だけだぶん私だけだ。

上手く言葉が出てこなくて、それでも言いたくて、ムアカ先生のほうを見る。

「——分かった。シルファ、あなたに任せるわ」

「すみません」

どうにか許可をもらって、おそろおそろ奥の病室へ入る。気配を感じたのだろう、あの金髪の子がこちらを向いた。だが私のことは覚えていないようで、誰だろう、という表情を見せる。

「具合は……どうだ？」

声をかけながら近づくと、この子の顔に怯えが走った。私の後ろのタシユアに、気づいたのだろう。

「心配しなくていい、大丈夫だ」

あの時と同じ表情に、思わず走りよって抱きよせた。

「大丈夫だから……」

小さく震える少女を、強く抱きしめて頭を撫でる。

こんなこと、あつてほしくない。

ここは、安全でなければいけない場所だ。
だから……。

Episode : 30

R u f e i r

目が覚めて、ぼんやりとあたしは天井を眺めてた。

なんだかこのところ、この光景ばかり見ている気がする。でも、夕べまではかなり熱が高くて辛かったけれど、今日はだいぶ楽だ。

それにしてもあたし、海に落ちたらしい。しかも何が原因か、かなりの高熱が続いたと、ムアカ先生は教えてくれた。

ただ自分では、覚えてなかった。

イマドとケンデイクの街へ出て、いつもの埠頭で海を見ていたところまでは、覚えてる。でもそのあと気がつく、ここだった。

――授業、進んじやっただろうな。

それがいちばん気がかりだった。なにしろもう、トータルすると2週間以上休んでる。

その時、話し声が聞こえた。誰かがあたしに会いたがってるみたいだけど、それをムアカ先生が止めてる。

でもけっきょく、先生が折れたみたいだ。

――誰だろう？

入ってきたのは、知らない女子の先輩だった。背が高くて、まっすぐな黒髪にきれいな紫の瞳をしてる。

「具合は……どうだ？」

聞かれて答えようとして顔をあげて、あたしは凍りついた。この先輩の後ろにいるのは……銀髪に紅瞳の、あの先輩だ。

声が出せなくなる。身体が冷えていく。

「心配しないでいい、大丈夫だ」

声とともに、駆け寄ってきた女子の先輩に、強く抱きしめられた。力強くて、でも暖かくて柔らかな腕の中。

この先輩が、本当に心配してくれてるのが分かる。

「大丈夫だから……」

ひさびさの、無条件の安心感。悲しくないのに涙がこぼれる。

そんなあたしを先輩は、ずっと抱いてくれた。

「もう、平気か？」

どのくらい経ったんだろう？ そう訊かれてうなずくと、この女の先輩が微笑んだ。とても優しいような笑顔だ。

でも、次の瞬間。

「シルファ、どこまで甘やかす気なのです？」

聞こえた声に、びくりと身体が震えた。

「だいいち、人を何だと思っているのやら。失礼にもほどがありましたよ」

「タシユア！」

シルファと呼ばれた先輩が、怒ったような声をだす。

「事実を述べただけですが？」

あたしを抱くシルファ先輩の腕が、力を増した。気にしなくていい、そう言いたいのが伝わってくる。

それからあたしの瞳を覗き込んで、先輩は言った。

「ケーキを、持ってきたんだ。食べないか？」

思いもかけない言葉に、思わず顔がほころぶ。

先輩も嬉しそうにうなずいた。

Episode : 31

「いま、切るから」

箱が開けられて、中から出てきたケーキに、ナイフが入られるけど、なぜか二切れだけしか、シルファ先輩は切らなかった。

少しの間があつて、タシユア先輩とシルファ先輩の視線が合つて…… やつと、もう一切れが出される。タシユア先輩がちょっとだけ面白くなさそうなのが、なんだか可笑しかった。

「さ、食べるといい」

「ありがとうございます……」

とても凝ったケーキだけど、何が入ってるのかはよく分からない。でも、とってもおいしそうだ。

ひとかけら、口に運ぶ。

——この味。

忘れていた記憶が、蘇る。あの時と同じ香り、同じ味……。

「どうした？」

急に食べるのをやめてしまったのを、心配してくれたんだろう。

シルファ先輩が声をかけてくれたけど、あたしは答えられなかった。涙がこぼれそうになる。

「大丈夫か？ どこか痛いのか？」

問いに首を振って、やつと答えた。

「これ…… まえに、兄さんと……」

シルファ先輩が、はっと息をのむ。

あとは言葉にできなくて、止まらない涙を必死にぬぐった。

いつだったろう？ 思いもかけずこれと同じケーキを手に入れて、
兄さんと二人で食べたのは。
でも、もう二度と……。

「——その、すまなかった」

「別にシルファが謝ることではないでしょう。悪意があったわけでは
ないのですから。」

ですが、偶然とは思議なものですね」

予想もしなかった言葉に、驚いて顔を上げる。

タシユア先輩と、目が合った。

——何かを奥底に秘めた、紅い瞳。

それが一瞬だけ、優しいものになる。

瞬間、理解した。同じなのだ。

違う時間、違う場所で、でも同じものを見てきた人。この学院で
ただひとり、「あれ」を分かっている人。

先輩のその瞳に、また涙があふれる。シルファ先輩が「大丈夫だ」
と言うように、あたしの頭を撫でてくれた。

多分かなり長い間、泣いてたと思う。けどシルファ先輩だけじゃ
なく、タシユア先輩も何も言わずに、待っていてくれた。

「さて、長居をしてしまいましたね。帰ることにします」

やっと泣きやんだあたしを見て、タシユア先輩が立ちあがる。

Episode : 32

「その、すまない。タシユアはいつも……ああなんだ。このあいだのことも、悪気があったとか、そういうのじゃなくて……」

「——はい」

今ならあたしにも、分かる。タシユア先輩は冷酷とかじゃなくて、人と距離を置いただけなのだ。

「良かったら……もう少し、食べないか？」

「あ、はい」

シルファ先輩に言われて、食べかけたままになっていたケーキに手をつける。オレンジの味と香りが、爽やかだった。

「——おいしい」

「そうか、よかった」

先輩の嬉しそうな顔に、あたしも微笑む。

「もっと、食べるか？」

「いいん……ですか？」

「ああ。そのために、作ったのだし」

こんどは二人で並んで、ケーキとクッキーを口に運ぶ。どれもお店で買ったみたいにおいしかった。

そうしてどのくらい、仲よく食べていただろう？ とつぜん何かのアラームが鳴って、持っていたクッキーを落としそうになる。

「あ、驚かしてしまったな。その……当番、なんだ」

「え、先輩、それじゃ早く……」

学院の当番は減点対象だから、忘れると大変だ。
急いで片付けながら、シルファ先輩が立ち上がる。

「タシユアのこと——すまなかった」

「いいえ」

先輩の言葉に首を振る。謝ってもらう必要は、ない。

「そうか。その、また、来るから」

「はい」

シルファ先輩の姿がドアの向こうに消えたのを確かめて、あたしは枕元の引出しから、一通の手紙を取り出した。

倒れる直前にファクトリーに問い合わせた、タシユア先輩の素性が、今ごろになって返ってきたのだ。

わざわざ手紙で寄越したのは、監視されてることを考慮したんだろう。手紙は時間がかかるけど、そのぶん安全だ。

封を切る。

——タシユア「リユウローン」。性別男性、年齢及び生年月日不祥。

その他、かなり細かいことが書いてある。

それをあたしは、破り捨てた。

あとがき

最後まで読んでくださり、ありがとうございます。

明日より第7作、「立ち上がる意思」の連載に入ります。今までと同じく、夜8時過ぎの更新です。

明日は筆者サイト、小説家になろう／読もう内での検索、既存作よりのリンク等から、新作へお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4180e/>

表と裏 ルーフェイア・シリーズ06

2011年2月2日08時40分発行